

最新！宗教情報 // No. 7

◎ドイツ教会、ユダヤ人迫害反対出来ず、と反省

【フランクフルト＝ENI・CJC】ドイツの教会は、ユダヤ系ドイツ人に対する1938年のナチスによる組織的攻撃70周年記念日の11月9日、当時多くのキリスト者が声を上げるという義務を忘れたと指摘した。

「1938年11月の組織的虐殺で、無防備な人々が辱められ、虐待され、殺された。礼拝の家は冒涇され、破壊された」と、プロテスタントとカトリック指導者は共同声明で語った。

「ユダヤ教会堂を燃やすというひどいイメージは私たちの記憶に焼き付いている」と、ドイツ福音教会(EKD)のウォルフガング・ユベール監督と独司教会議議長のロベルト・ツォリッシュ大司教は「11月の組織的虐殺はホロコースト(大虐殺)という、想像できない破壊と破滅の時への序曲だった。その結果をヨーロッパ、世界、特にユダヤ人コミュニティはなお耐えなければならないのだ」と述べた。

「組織的虐殺は慎重に計画されただけでなく、何年にもわたる宣伝の、そして政治的な準備、公然の反ユダヤ主義扇動、法律による組織的な排除、冷酷な差別待遇、および迫害に続くものだった」と言う。

ユダヤ系ドイツ人とその財産に対するナチスによる一連の攻撃は「クリスタルナハト(水晶の夜)」とか「割られたガラスの夜」と呼ばれた。

ただユダヤ人中央評議会のシャルロッテ・クノブロッホ議長は、南ドイツ新聞(電子版)とのインタビューで「水晶の夜」という表現を避けるべきだと言う。極右の全国民主党的禁止を呼び掛けるインタビューの際に「クリスタルは何か美しいものを意味しているけれども、攻撃は組織的虐殺の一部だった」と語ったもの。

ベルリンでは、ゲオルク・ステルジンスキー枢機卿が、ユダヤ人迫害に対して示したカトリック教会の態度に遺憾の意を表明した。カトリック者の大半は黙っていた、と大司教は指摘した。

ニーダーザクセン州ブラウンシュヴァイクのルター派フリードリヒ・ウェーバー監督は、教会が、それらの声なき人のために声を上げる務めに失敗した、と牧会書簡で語った。

各教会で読み上げられた書簡の中で、キリスト者が国家社会主義の反ユダヤ主義に共同責任があった、と認めている。ナチス時代の絶滅政策に対する態度を通して、キリスト者は「重い罪」を自身に科したと言う。

ユベール監督とツォリッシュ大司教は、人々「特にキリスト教会では、暴力には反対だが、恐怖と無力感に捕らわれた」と指摘した。またユダヤ人を支援したキリスト者の例としてベルンハルト・リヒテンベルク司祭とヘルムート・ゴルヴィツァー牧師の名を挙げたが、「2人の、さらに他のキリスト者や教会指導者の証しで、他のものの臆病なり失敗を相殺は出来ない」と述べている。

◎『家の教会』指導者一家釈放される

【CJC＝東京】中国の非公認地下教会『家の教会』指導者の1人、バイク・ザン・ミンスアン牧師一家が10月所在不明となり、行方が懸念されていたが、11月8日になって中国当局から釈放されていたことが確認された。

米国に本拠を置く人権監視団体『対華援助協会』によると、牧師と夫人、その姉妹の3人は10月27日、河南省南陽の収容所から釈放された。10月20日に北京で開かれた家の教会連合の3周年記念式典に参列しようとした所を拘束された、という。

K・バルトのテキストのポイント、 まとめ、影響史

【神学】(p.27-33)

- 「しかし同時に」(p.27, l.13, 24)
 - 二つの命題の同時性→弁証法神学の基本形
- 参考: ルター
 - 「義人にして同時に罪人」 simul iustus et peccator
 - 1515-1516、ヴィッテンベルク大学でのローマ書講義の中で
 - バルト「半分罪人で、半分義人であるのではなく、両方とも完全に、なのである」
 - 「罪人」の部分減らして、「義人」の部分を増やしていくという態度は、「信仰義認」に反する。
 - 参考: 文化プロテスタンティズム、ナチズムにおける進歩史観

2

【まことの宗教】(p.34-37)

- 「恵みの宗教」である点で、浄土教とプロテスタント信仰の間に根本的な違いはない。
 - 参考: 悪人正機説→親鸞「善人なをもて往生をとぐ、いはんや悪人をや」(『歎異抄』)
- 決定的な違いは「イエス・キリストの名」のみ。
 - バルト神学のキリスト論集中

3

親鸞とルター

- 親鸞
 - 阿弥陀仏の本願は、あらゆる人を救済の対象とし善悪の差別はない。しかし善人は自己の能力でもってさとりを開こうとするから、仏に全面的に頼る心が薄い。だが悪人は自己の力ではさとりえず、仏の救済力に頼る以外に道はないので、この者こそ阿弥陀仏の救済の対象となる。
- ルター
 - 「大胆に罪を犯せ。しかし、それよりもさらに大胆にキリストを信じ、キリストにおいて喜べ。」(p.9, l.3)

4

【神の人間性】(p.38-47)

- 初期のバルト
 - 神の「神格性」を強調。
 - 自由主義神学、積極的神学からの撤回
 - 「絶対他者」としての神、神と人間の間断絶(無限の質的差異)、上から下への道のみ
- 後期のバルト
 - 神の「人間性」への気づき。
 - 「絶対他者」は聖書の神と同一視されてはならない。むしろ、それは哲学者の神の神格性に似ている。

5

バルト神学のまとめ

1. 啓示としての「神の言葉」の再発見
 - (空間的意味) 神と人の「断絶」
 - (時間的意味) 期待しつつ「待つ」。
参考: クロノスとカイロス
2. 弁証法神学
3. キリスト論集中
4. 神の自由としての神の「人間性」

6

バルトの影響史

- 日本の神学に対する影響
 - バルト神学は、日本の教会に絶大な影響を与えたが、それはドイツにおける教会闘争的なパトスとはしばしば切り離されて受容された。
 - 「大東亜共栄圏に在る基督教徒に送る書翰」(1944)
- 滝沢克己(1909-1984)におけるバルトの受容
 - キリスト論集中の否定:「インマヌエル」思想
 - マタイ1:23「見よ、おとめが身ごもって男の子を産む。その名はインマヌエルと呼ばれる。」この名は、「神は我々と共におられる」という意味である。
 - 天皇中心へ

1 **日本基督教団より大東亜共栄圏に在る基督教**
2 **徒に送る書翰、1944年**

3
4 **序文**

5
6 基督教は福音である。即ち「大なる歓喜の音信」
7 である。故に四福音書あり、福音を伝えるために使
8 はされた徒の旅行記あり、使徒パウロの著作は何れ
9 も教会或は同信同志の人々に贈った書翰である。
10 福音書に始まった聖書はアジアの七教会に贈った
11 ヨハネの書翰で終ってゐる。基督教は実に福音であ
12 る。

13 今茲（ここ）に日本基督教団が東亜共栄圏内の諸
14 教会及び同信同志の兄弟達に書翰を贈る所以は、基
15 督教が「大なる歓喜の音信」であると云ふ信仰に基
16 く為にして之を現代の使徒的書翰と称するも言ひ
17 過ぎでなからう。

18 日本基督教団は東亜共栄圏内の基督教会に対し
19 て常に関心を有し其の発達のため熱祈して已（や）
20 まない。これが為め教団は共働者を遣し、又必要な
21 ものを送らうと計画してゐるが今日の事情に於
22 ては其の志望の如く実行できないのを甚だ遺憾と
23 してゐる。已むを得ず、先づ教団を代表する公同的
24 使徒的書翰を送って挨拶し、我等の平素の志を略述
25 する事にした。其の詳しき内容に就いては受信者が
26 本書翰を詳（つまびら）かに通読せられん事を望む。

27 日本基督教団の現代的使徒書翰は、本書が第一信
28 であつて、続いて屢々（しばしば）書翰を贈る計画
29 である。望むらくは諸君が此等の書翰を隔意なく迎
30 へて、これを文字通りに解釈して、我等の志を理解
31 し、信望愛を同じうせられん事である。少数ではあ
32 るが日本基督教団より特派した伝道者あり、書翰中
33 に若し諸君に理解し難き所あらばこれを詳かに懇
34 （ねんご）ろに説明するであらう。

35 彼等も亦（また）、使徒パウロの記せし如く「基督
36 の書」であるから諸君は隔意なく彼等と親交せられ
37 ん事を併（あわ）せ望まざるを得ない。

38 予は教団の統理者として種々記したい事多いが、
39 今は書翰を紹介する文だけに留め、後便に譲る事と
40 した。書翰を読んだ人々にして其の腹蔵なき応答を

41 寄せられるならば、我等の喜悅これより大なるは無
42 い。

43 最後に予は二千年来伝へ来つた使徒的挨拶を以
44 て此の序文を終らう。「願はくは、主イエス・キリ
45 ストの恩恵、神の愛、聖霊の交感、汝ら凡ての者と
46 偕（とも）にあらん事を」

47 昭和十九年

48 千九百四十四年復活節の日

49 日本基督教団

50 教団統理者 富田 満

51
52 **第一章**

53
54 我ら、日本に在りてキリスト・イエスとその福音
55 とを告白し、その恩寵の佑助によりて一国一教会と
56 なれる日本基督教団及び其（それ）に属するもろも
57 ろの肢は、東亜共栄圏内に在る主にありて忠信なる
58 基督者たちに心よりの挨拶を送る。願はくは我らの
59 主イエス・キリストの恩寵と平安、常に諸君の上に
60 あらんことを。

61 （中略）

62
63 **第二章**

64
65 愛する兄弟たちよ。

66 我らは諸君に期待し、諸君を信頼してゐる。諸君
67 は、「凡（およ）そ真なること、凡そ尊ぶべきこと、
68 凡そ正しきこと、凡そ潔よきこと、凡そ愛すべきこ
69 と、凡そ令聞あること、如何なる徳、いかなる誉に
70 ても汝らこれを念ひ」（ピリピ書四・八）。これを認
71 むるに吝（やぶさ）かでないであらうことを。この
72 大東亜戦争遂行にあたって、我が日本と日本国民と
73 が如何なる高遠の理想と抱負とを懐いてゐるかは、
74 次第に諸君の了解されつつある所であらう。我らも
75 亦政治経済文化の各部面で諸君と提携するために
76 腐心し挺身（ていしん）しつつある我が朝野の、軍
77 官民の先達たちの報告によって、諸君の中に我らの
78 学ぶべき「凡そ愛すべきこと、凡そ令聞あるべきこ
79 と」のあるを聞き知り、尊敬と共感と親愛の情を覚
80 え、諸君に強く牽（ひ）かるる思ひがする。諸君が

1 地域の如何（いかん）を問はず、文化の傾向を論ぜ
2 ず、よきものに共感し、尊きものを尊しとする公明
3 正大の心を有ち、敵性国民の無責任にして放徒なる
4 個人主義とは全く類を異にすることを確信する。而
5 も諸君は人間の個性的な面に於てまことに深きも
6 のを包蔵し各自の職域にあつて飽くまでも自己の
7 深い信念に生き、それと密接に繋つてゐる高い公の
8 犠牲的精神を備へてゐらるる様子を聞くに及んで、
9 早く諸君の風ぼうに接したいと願ふ念ひや切であ
10 る。神若し許し給はばいつか我らは諸君の許に往き、
11 諸君も我らの許に来て、互に個人的に親しく相交
12 り、顔と顔とを合せて相識り、かたく手を握り合ふ
13 ことも許されるであらう。しかし我らも諸君自身を
14 相識ること浅い如く、諸君も亦我が日本の真の姿を
15 識ることに於て未だ不十分であるかも知れない。乞
16 ふ、我らが今少しく「大胆に誇りて言ふ」（コリン
17 ト後書二・一七）ことを許せ。

18 抑々（そもそも）我が日本帝国は、万世一系の、
19 天皇これを統治し給ひ、国民は皇室を宗家と仰ぎ、
20 天皇は国民を顧み給ふこと親の子におけるが如き
21 慈愛を以てし給ひ、国民は忠孝一本の高遠なる道徳
22 に生き、その国柄を遠き祖先より末々の子孫に伝へ
23 つゝある一大家族国家である。我ら国民は、畏（お
24 それお）くも民を思ひ民安かれと祈り給ふ天皇の
25 御徳に応へ奉り、この大君のために己自身は申すま
26 どもなく親も子も、夫も妻も、家も郷も、悉（こと
27 ごと）くを捧げて忠誠の限りを致さんと日夜念願し
28 てゐるのである。この事實は諸君が既に大東亜戦争
29 下皇軍将士の世界を驚倒せしむる勇猛果敢な働き
30 をみて、その背後に潜む神秘な力として感付いてゐ
31 らるる所であらうが一度でも我国の歴史をひもと
32 いた者はその各頁がこの精神に充ち満ちてゐるこ
33 とに驚異せられるに違ひない。

34 兄弟たちよ。諸君は使徒が「凡そ真なること、凡
35 そ尊ぶべきこと」と語つてゐるところのものは、単
36 に教会の中なる諸徳について云つてゐるのではな
37 く、教会の外的一般社会の中にある斯（か）くの如
38 きものを、思念せよ、尊敬せよと云つてゐるのであ
39 る事を十分御承知と思ふ。この美德を慕ふ感情にお
40 いても諸君は我らと一つであられるであらう。分裂

41 崩潰の前夜にある個人主義西欧文明が未だ一度も
42 識らなかつた「凡そ尊ぶべきもの」が、東洋には残
43 つてゐる。我らはこの東洋的なものが、今後の全世
44 界を導き救ふであらうといふ希望と信念において
45 諸君と一致してゐる。全世界をまことに指導し救済
46 しうるものは、世界に冠絶せる万邦無比なる我が日
47 本の国体であると言ふ事実を、信仰によって判断し
48 つつ我らに信頼せられんことを。

49 諸君の既に屢々（しばしば）聞き知つてゐられる
50 やうに、我ら日本人の組先は非常に謙虚に、而も積
51 極的に、心を打ち開いて外来の文化を摂取したので
52 ある。中国よりは、君らの優れたる父祖である孔、
53 孟の教を。印度よりは、君たちの聖者釈迦を開祖と
54 する仏教と之と共に印度文明を。而も我らの先組た
55 ちは決して当時の先進諸外国の文化に心酔したの
56 ではなく、非常に博大（はくだい）な心と謙虚な思
57 ひをもつて之を摂取し習得したのみならず、高く強
58 い国体への信念と之に基く自主性に立つて、これを
59 我国振りに副ふやうに酔（じゅん）化し日本化して
60 来たのである。かの聖徳太子の準備せられ中大兄皇
61 子の完成し給うた大化の改新は、支那古代の儒教と
62 制度文化が日本化して具現された最初の結実であ
63 る。次に我が鎌倉時代の日本仏教特に道元の開いた
64 日本禅は、印度の仏教が中国を経て我国の土壤に吸
65 取消化され、之に全く日本的な新生面を開いたもの
66 で、この時代以後我が国民精神の基調となり日本武
67 士道の培養の素となつたものである。又支那の曇鸞、
68 善導の浄土門信仰は、日本の法然、親鸞によって世
69 界の宗教学者達が驚歎するほどの絶対恩寵宗教の
70 立場に醇化発展を遂げたのである。我が飛鳥天平の
71 文化、平安時代の文芸より、鎌倉時代の武芸、禅学、
72 彫刻にいたるまで、更に室町、安土、桃山時代の豪
73 華なる建築、茶道、絵画、江戸時代の儒学、国学、
74 蘭学より、さては明治維新以後のヨーロッパ文明の
75 摂取醇化にいたるまで、凡て日本人の深い謙虚さと
76 己を失はない高い信念との所産でないものはない。
77 我らの父祖は此等の外国のよきものを虚心坦懐に
78 学ぼうとしたと共に、深い批評精神に基いて之に創
79 意を加へ、日本化し、独特の日本文化を産出し、今
80 日の隆盛をいたしたのである。

- 1 かくの如き歴史の盛観を現出することを得た所
- 2 以は、日本精神の創造的活動の根柢に儼乎(げんこ)
- 3 たる尊嚴無比の国体が存したるに由る。殊に外来文
- 4 化の摂取に当って指導者達が常に新文化の先覚者
- 5 であったことは、日本精神が如何に強靱にして而も
- 6 柔軟性に富んでゐるかを物語る。まことに靈峰富士
- 7 に象徴せらるる明るき清き直き心である。
- 8 右の如き大精神は、ただ日本の国土内に留まるに
- 9 はあまりに崇高にして廣大無辺である。今より十余
- 10 年前に独立し爾(じ)来益々発展を遂げつつある満
- 11 洲帝国といひ、我らと協力して敵米英に宣戦した中
- 12 華民国といひ、盟邦泰国、過ぐる日独立を祝祭した
- 13 新生ビルマ国家、最近独立して新政府を組織した我
- 14 らの兄弟フィリッピン、その他如何なる地域いかな
- 15 る辺境といへども、恰(あたか)も太陽が万物を光
- 16 被化育するやうに、この大精神に照し掩(おお)は
- 17 れてゐないものはなく、相共に深い決意を以て互に
- 18 扶(たす)け、互に尊敬し、互に愛し、正義と共栄
- 19 との美しい国土を東亜の天地に建設することによ
- 20 って神の国をさながらに地上に出現せしめること
- 21 は、我ら基督者にしてこの東亜に生を享けし者の衷
- 22 心(ちゅうしん)の祈念であり、最高の義務である
- 23 と信ずる。
- 24 (以下省略)